



曆日星明

上



別置

二五
2162
1



門 = 5
號 2162
卷 1

= 5
2162
1-2



信濃



韓昌黎曰。大匠無棄材。尋尺各有施。蓋謂善盡材之用也。信濃大江龍水翁。博學多通。精研象緯之學。而著述甚富。其子昌玄。

信濃
龍水翁

889

好學嘗入京從予而遊頃眎乃
翁所著曆日星明而需序之閱
其書解釋時曆所注日辰方位
者也夫古今言曆者上從堯典
義和之職中漢唐元明暨

本邦學者所推詳之書下逮輓
近世俗雜著汗牛充棟大之可
以贊授時之政小則為幼學審
理推算之具各以濟其用矣是
書雖僅々一小冊亦民生日用

不可棄者也。若夫棟梁之材，則家簾存焉。

享和壬戌冬至

墻東隱士撰



我日星明神
雲生曰重通吉以遂凶
新輝君子之也擢法
遠蒙而之先何以向之去凶
為其終之令情也之
破只或神無於平和之

事以之其類也信德士曰弱
 翁之親于翁其考厥之生而一
 篇不特信之夫其心亦以之
 去以報夫物之與與明也
 之書也亦之信以物由信之
 之其心亦其心之子其心

何子午京河東之入流西子之節
 深持此書以積先人之志也
 子之信也信以子之信也
 學之校定也信以子之信也
 其為教也信也年一之因級此
 言以信也信也

曆日星明

目次

- 一 古今曆
- 一 年號
- 一 朔望弦晦 兼潮汐進退
- 一 大小
- 一 閏月
- 一 日月食 兼芻食
- 一 二十四氣 兼日月道路
- 一 七用

曆日星明

坎水園藏

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 曆, 日, 星, 明, 目, 次, 朔, 望, 弦, 晦, 閏, 月, 日, 月, 食, 廿, 四, 氣, 七, 用]

一 月建 亥北斗七星圖

一 病度值年值月宿曜值日

一 十幹十二枝

一 十二直

一 納音

一 歲德明方 亥之鏡曼珠形

一 金神

一 八將神

一 鬼門

一 去公

一 社日

一 庚申

一 彼岸

一 入梅 亥紫花落

一 八專

一 十方園 亥天一天上

一 八十八夜

一 半夏生

一 三伏

一 二百十日

一 冬至 亥立統

一 節分

一 天教日

一 大明日

一 天恩母食月德

一 鬼者日

一 凶會日

一 受死日

一 童日 渡日

一 下食 歲下食

一 掃忌日

一 血忌日

一 姓亡日

一 十死日

一 五墓日

一 滅門天禍狼藉

一 天火地火

一 解曆辟

一 立表測景定節氣

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 日, 月, 星, and 占.



曆日星占系列

伝流 伊奈 吉川崇廣 吉川元甫 撰

古今曆

ふくろ 何れは 正け 初一 一より 地の 在天 以何
く 是地 一を ねん 終る 一より 一と 一も 一と 一も 一と 一も
一を 河星の 数く 一も 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
堯舜 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と
と 造 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と 一と

星辰の運行春夏秋冬のは来方夜は割の長短
 を明くしむるやうに製する意は是なるを曆法
 を知しむ此は尚書小元より漢の年を考を
 渾天像と云又月の大小年を星餘を設く及耕
 獲の時を知しむ周漢以後の術益精く元のは
 至るるを考りぬ

吾朝の神武紀を考るに夏正のみを以て天武
 以来の法を以て曆法とすしめ今日も長曆と春
 秋述曆とを考るに悉くを以て漢曆を以て
 らるるを以て推古帝は此の時百濟の僧曆術を

傳ししといふも世に行ふは改持統天皇四年を以
 て劉宋の元嘉曆を以てし是聖武天皇の御宇に
 唐の僧智光と名付公唐の儀鳳曆を以てし又唐の
 ら新唐帝の同唐の一行禪師の天竺曆を以てし武
 宗の御宇に元紀曆と大衍曆とを兼て行ふ清和帝
 御代に曆官春日麻呂奏して渤海^が緯^の緯^をり^てを^る
 唐の宣明曆を以てし其後村上帝の天徳年時司
 曆博士賀茂保憲と名付しりまはしむるに其時人安
 倍晴明この道を受てしり代り其家より其
 法を守らるる改るるを考るるを以てし其後

曆欽天曆應天曆予とせしむるに必ふをいぬし是
 を當時の天度ふりて之より後天運自然のまが
 ひをきしむるに直明曆を月らしむるに百年餘を
 推考したるに日月の蝕曆ふり記せしむるに又
 天不^{つひ}入^りとせしむるに曆の原を考へて二日竹を合朔と一
 日を^{つひ}後^ひひりては内^のの^はとせしむるに不^ふ靈^{れい}元^{げん}帝^{てい}の貞^{しん}享^{じやう}
 二年保^や井^{せい}春^{しん}海^{かい}とせしむるに曆法を^や結^{むす}し^て元^{げん}の授^{じゆ}
 の曆^{りき}よりし^て内^のの^はとせしむるに天^{てん}象^{しやう}と測驗し^て法^{ほふ}を^や換^{かへ}
 するに新^{しん}曆^{りき}を^や造^{つく}るに^は明^{めい}比^ひ曆^{りき}の始^{はじめ}より^は是^{こゝ}より^は
 の曆^{りき}を^や止^{とど}め^るに新^{しん}曆^{りき}を^や頒^{のたま}ら^せら^るに^は是^{こゝ}より^は貞^{しん}享^{じやう}

曆^{りき}是^{こゝ}也^{なり}と^して^はより^は以^{もつ}來^{きた}年^{ねん}歲^{さい}時^じ氣^き節^{せつ}正^{せい}しく^は毫^ご毫^ごを
 たり^したり^しに^はと^して^はより^は七^{しち}十^{じゆ}年^{ねん}を^や經^へる^には^は又^{また}天^{てん}行^{かう}ふ
 差^さひ^ひく^くたり^したり^しに^は極^{ごく}國^{こく}帝^{てい}の^は貞^{しん}享^{じやう}に^は事^{こと}不^ふ
 改^{かへ}曆^{りき}の^はと^して^は西^{せい}土^とより^は海^{かい}の^は憲^{けん}曆^{りき}と^して^は朝^{あさ}ら^る
 同^{どう}し^ては^はも^もも^もの^は二^に日^{にち}の^は後^ごより^は國^{こく}解^{かい}し^て
 二^に月^{げつ}の^は後^ごより^は且^{かつ}日^{にち}月^{げつ}蝕^{じやく}を^やと^して^は以^{もつ}當^{たう}曆^{りき}に^は比^ひ
 するに^は是^{こゝ}より^は推^{おし}考^{かう}するに^は曆^{りき}を^や五^ご日^{にち}に^は満^{まん}月^{げつ}を^やさ^す
 るに^は清^{せい}曆^{りき}と^して^は難^{がた}ふ^はと^して^は先^{せん}曆^{りき}の^は後^ごより^は是^{こゝ}より^は
 なるに^は是^{こゝ}より^は月^{げつ}と^して^は天^{てん}の^は月^{げつ}と^して^は五^ご日^{にち}の^は月^{げつ}と^して^は且^{かつ}
 満^{まん}月^{げつ}の^は一^{いつ}流^{りゅう}し^て本^{ほん}月^{げつ}大^{だい}なる^には^は五^ご日^{にち}の^は月^{げつ}と^して^は是^{こゝ}より^は

の年々々々穴々四々々のより白き旅子を以て皆く天
皇をやまやして白雉と改む是又和漢改元のそいひ

朔望弦晦并御進退

朔ハ日と月と會波日ハ上ニ月を下にゆくと日月の
精氣をんをたけしとて天化の陽氣は血をに似
水々とも盈滿しとて月も一朔ハ陰也後ハ月也其
朔ハ月の暗晦^{ツク}きはまりてこきまり日を離れて光を
せしをて死魄の産ととも高めて朔ハ月ハ魄^{ツク}也
月輪のむらりるに光をいふはつらとハ月を月とては也
やとて望とて日をともて遠くともては光を月とて

とらと望月とて遠くつとて初ハ日と月と生波日輪を離
てて日光を射とては光をよとてハ不明と魄と相
とては相をて七日ハ日の間にはり望ハ五六日の者あり
日月白の對しとて東西と望ある内とて日光を面
とては光をともとてハ光とともとてハ通波月を光とて
みらとて天卜の水をゆくとては朔ハ陽中の陰と
てハ陰中の陽とて是ハ日月の精を以てともとてハ
病くとてとてハ光とともとてハ月影の影と
九二二日の間を御進退ハ月光上弦と同一晦ハ
とてハ朔とて月光也減とてハ日と通つては光とともと

をくちり明きり日地下より西面をさる所は地満く
大陽のせりを月つりしつらるるを月食を以て食食強きり
若くは強弱を強くしゆるなり日ハ朔日月ハ十五十五夜
にかりかかくしるる毎月食をさるるなり日ハ日ハ黄
道を行月ハ白道を以てさるるなり白道と梅道の如くお
交れり西交の西を以て交中交と云胡公の時日月同く
さるるなりなり食食強くしるる南北の違りなり毎
月食をさるるなり十の食を皆既とす又日月出後の
時ハ食食さるるなり入るるを若くしるる日食ハ日を
陽曆北を陰曆とす一月食ハ北を陽曆南を陰曆とす

日食陰曆ハ西北より解とす一ハ正北ハ北より東より
陰曆陽曆ハ西南よりかけ初ハ西南より東より陰曆を
月とく陰曆ハ東南より缺とす一ハ西南ハ北より西南より
陽曆北を東北より初ハ正北より東より西北より陰曆を月
食は分ハ東を以て同日食は分ハ地の南より北より陰
曆より初ハ陰ハ日食陽曆ハ初ハ北月南より
ハ南國の如くハ北に日食ハ北を以て北より南より
ハ北より南より食食ハ北より南より日月の食食を
推して術ハ曆書ハ其法有りなりハ北より南より
ハ北より南より食食ハ北より南より元本大陽大陰

曆日星明 十三 抄本園藏

意のりくまを魚し氣級合せく二百六十五日二十五
 別是日輪天をめぐり一日四の月ありて一歳を成す
 の所なり也日ハ黄道をめぐり天の中を赤道と云せ赤
 道と輪遠の赤とくからして其南北の間半は赤道の
 一ををめぐりては外ハ赤道の月ハ九道あり青
 道出黄道東赤道出黄道南白道出黄道西赤道出黄道北黄道一日之
 其道節に附くことありて同くは南北極は
 天の軸ゆく日月を宿を四つ也二極を準的つらと皇
 都ありて北極は北をゆくこと二十五度及條西上の極西の南
 の北と同一北極と云ふ十七度南をゆくことひき極至の

時の日るは是より二十度南南北極より九十二度を
 赤道を及ぶるは極の中央より南の天球を年分して南
 北を二月二月は秋の中分日のゆくは是より北極南
 極より十五度南を又是より北極の日の道
 ○立春 正月節 太陽の氣始くはるなり
 ○雨水 青月中 陽氣地の上候して雪も氷も解て雨水となり
 ○啓蟄 二月節 陽氣地中より動きて蟄虫起るは候なり
 ○春分 二月中 日付天の中央なる赤道をゆくは夜ともは昼候
 かく是より候温は法の中分なりて卯より未と酉より入
 ○清明 三月節 草木生るは候なり
 ○穀雨 三月中 雨より和ひて五穀生る候

○立夏 四月中 夏の気始まるなり

○小満 四月中 草木のえびらこふまゆる 御幸るまひん

○芒種 五月中 芒^のつゝ 穀類を種する時なり

○夏至 五月中 至^る 夜短このまじり日天のふのまををさうて地

○小暑 六月中 大雨のふまゆる 小なる暑あり

○大暑 六月中 暑の極まるなり

○立秋 七月中 秋の気始まるなり

○処暑 七月中 暑の止まるなり 秋の気始まるなり

○白露 八月中 陰気が多かり 暑退ひく 白露なるなり

○秋分 八月中 此日晝夜をえつり 昼夜を短くし 秋の

○寒露 九月中 寒葉のふるまゆるなり

○霜降 九月中 霜の降りしるなり

○立冬 十月中 冬の気始まるなり

○小雪 十月中 大雪のふりしるなり

○大雪 十一月中 雪のふりしるなり 夜長まのなり日

○冬至 十一月中 南の極なるなり 晝短のなり

○小寒 十二月中 大寒のふりしるなり 十分なり

○大寒 十二月中 寒の極まるなり

右二十日あり 立春 春の気始まるなり 立春 春の気始まるなり 立夏 夏の気始まるなり 立秋 秋の気始まるなり

少少近諸大岡凌多ひなる事如心さきとことき八月月廿星
 天に在る事の宿宿な化せりものほく時曆の月日配値
 事とよ大と異なりが年月日配値事と元來佛
 家の視めく曆術に寔徳をいふ如し

十幹十二枝

十天幹十二地まじりて大境より之を^{木健}の運轉を
 観て初と終をいさるる事なり幹はもとて初と終
 をいさるる枝は十幹を木の方とあてし十二支なる事なり
 若物方位を果しとてとてちうて位をいさるるに樹小
 は土家の之干支と元來五行の陰陽なりと十十二とある

りのいさるる事なり天徳造化の天根源と天數の五五陰五陽
 合して十幹とあるは天不配と陽と守地數の六六陰六陽
 合して十二枝とある地源と陰と守合して天地の
 功用をおもひのこしとて甲乙木丙丁火戊己土庚辛金
 壬癸水の五行の天の五行の合て五行はあおのく陰陽
 別業の若別あり甲丙戊庚壬を陽と乙丁己辛を陰と
 丁己辛癸を陰とイカレ故小和陰の事なりと甲
 乙己辛癸の事なり木と金と其由小和事なり甲
 乙丙丁己辛壬癸の事なり今十二支を混とてあはしめり陰陽
 配値の甲乙己辛の干丙丁己庚辛の枝の干壬癸の

を物にして存在く又して軌也ややく字甲と脱と崩を
を物くまゝに家於意あり軌を器としてと次

丙の炳也夏の令をて軌して至るは物終るをを物と
とて物とてはとては此世を物とては炳ふ物とては
炳を器として丙とす

丁の當也とては陽氣はとては陰氣と相當の物とては
又丁字の丁は物終るは物とては物とては物とては
丙の炳也丙は正季と旺とては物とては物とては
と次とては物とては物とては物とては物とては
物とては

己の起也物とては陽氣とては物とては物とては物とては
と物とては物とては物とては物とては物とては

庚の更也秋の令をて物とては物とては物とては物とては
ち一物とては物とては物とては物とては物とては
各物とては物とては物とては物とては物とては物とては
癸の水とては物とては物とては物とては物とては物とては
と物とては物とては物とては物とては物とては物とては
生を物とては物とては物とては物とては物とては物とては
と物とては物とては物とては物とては物とては物とては

辛の新也秋の金なり金の味は新物は物とては物とては

りつ何く又致るるやと云々新小治の意あり
主の姓也と云々の事ありと云々の事あり
懐妊する事ありと云々の事あり

癸の揆也孕する竹及の積る陽氣の事ありと云々の事あり
と生れんとしと云々の事あり

子のこと後らと易の復卦一陽の事後らの子は
と云々の事あり

丑の紐也易の臨卦と云々の事あり
陰の氣を紐ひ止りて交せしめんとしと云々の事あり
略して丑と云々の事あり

寅の瀆なり易の泰卦と云々の事あり
加る意ありと云々の事あり
葛を承りたりと云々の事あり

卯の養也二月の陽なりと云々の事あり
竹本もつと云々の事あり
卦と云々の事あり

辰の震也易の夬卦と云々の事あり
のひを養ふ方物ありと云々の事あり
と云々の事あり

己の止也四月の事ありと云々の事あり

易の乾卦の死

午の長也易の姤卦の死一五月のちりく下二迄
生一宮物をのくおしをさるるま

未の少也六月の云解する所なく味のくちく味は身は
母の味のかれを片は味のものなく破若日辛鹹の味より
故く味を味くく未と易の既の卦なり

申の身也易の否卦の死七月のちりくの暮もこれ
のちりくをさるるま

酉の縮也八月のちりくは内物のちりくは縮のちりくは
も登りくも易の觀卦の証也

戌の滅也滅を略くく戌と易の剥卦のちりく九月の
ちりくをさるるま

亥の歎也亥の歎の略く十月の六陰満く萬物をさるる
氣有り故めまももは色も紫くく金鉄虫魚もく
かち易の坤卦のちりく

凡天地の宮氣を合むの歌法所消息くは世に
一幹枝とる宮とく十千六回十二は五回く甲子
より癸亥ふ至く六十とあつ甲子を首とく六十年
盈るもあねを一甲子と稱くと天地の五行交會和合して
万物生く養化を窮くは相とる相とのを吉

